2020年12月発行

関東学院大学　キリスト教と文化研究所

ニュースレター News Letter

No.48

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

細谷 早里 所長
Sari Hosoya

2020年度は新型コロナウィルスの蔓延により、これまでとは異なる日常となりました。講演会やシンポジウムは開催できませんでしたが、研究プロジェクト、グループではオンラインシステムなどを用いながら、グループでの研究会が開催されたり、個人での研究という形で研究活動が行われております。キリスト教と文化研究所では昨年度に引き続き、バプテスト研究プロジェクト、坂田祐研究グループ、キリスト教と日本の精神風土研究グループ、いのちを考える研究グループ、新約研究グループ、キリスト教と平和研究グループ、奉仕・ボランティア教育研究グループ、キリスト教とシェイクスピア研究グループといったひとつのプロジェクトと7つの研究グループが活動を行っております。そのひとつひとつが学部や専門分野を超え、様々な視点で研究に取り組んできました。

コロナウィルスの蔓延により、これまでの生活の習慣、生活のしかた、価値観や考え方などが問い直されることとなりました。春学期から始まったオンライン授業にも慣れ、必要に迫られてITスキルを身に付けることとなりました。授業のみならず、会議や研究会をオンラインで行うことができるようになり、これまで参加を躊躇した遠方での学会の参加や遠方の研究者との研究会も行えるようになりました。新しい日常では研究スタイルも多様になったと言えるでしょう。その一方でオンラインという閉じた中での研究は、これまで以上に異分野との交流も限定的となり、異なる視点を排除する危険性もはらんでいるとも言えます。不確実な日々に不安を感じる中、人々の危機意識にも大きな差があり、人々の考え方の違いに今まで気付くことがなかった分断が見られているように思える昨今、社会の不透明さに翻弄されて、自分たちだけの世界に閉じこもってしまうことも多くなるでしょう。学術的な議論や科学的な検証の機会は減り、結果として人々の隔たりをさらに広げることになってしまうかもしれません。本研究所の学際的な研究が、このような現状を緩和する契機となればと願っております。

2019年度活動報告

『バプテストの歴史と思想研究』(研究論集④)の発刊について

研究会代表　村椿　真理
Makoto Muratsubaki

2020年3月末、関東学院大学キリスト教と文化研究所研究論集『バプテストの歴史と思想研究』(Studies in Baptist History and Thought)第4号を本学大学出版会から刊行したので、ここに報告する。

これはバプテスト共同研究会が、2019年度「研究所プロジェクト企画」として認可を受け、出版助成を許されての刊行であった。研究会の論集の刊行継続希望に対し、所員会議のあたたかなご理解とご支援をいただいての出版であった。そこで研究所長の細谷先生をはじめ、運営委員会の皆様のお力添え、また出版会の四本陽一氏、上島悠花氏のご協力に対し心からの感謝を申し上げたい。

本ジャーナル誌は以前にも本紙面で紹介したことがあったが、日本のバプテストの学術研究、及び日本のバプテスト教会の教会形成、また同じバプテストの伝統に立つ他の教育機関のさらなる発展を願い発刊してきたものであった。毎回4、5本の論文集であるが「バプテスト・フラッグシップスクールとしての関東学院」を自覚して、研究成果発信の試みをしてきた。2019年度、第4号の目次を紹介すると、第一章「18世紀英国カルヴァン主義的バプテストにおける聖晩餐論」、第二章「熊野清樹を通して見る日本バプテスト(1)－誕生、幼少期から受浸に至るまで－」、第三章「最初の名誉都民となった宣教師ウィリアム・アキスリング」、第四章「バプテスト教会から去った諸教会の歴史とその諸問題」と、研究会メンバーそれぞれの研究課題に基づく従来の研究テーマに沿った内容である。バプテスト共同研究会はこれまで所属メンバー個々の研究課題を定例会で発表し、その研究成果を論文集としてまとめてきたが、こうした研究の積み重ねと継続に意義を見出してのことであった。

本研究会は2011年に大学の教科書として『見えてくる　バプテストの歴史』を西南学院大学のバプテスト研究者と共同執筆し出版したが、その年度から本学法学部においてのみではあるが、教養科目の一つに「キリスト教史」(バプテスト史)A・Bのクラスが設けられ、毎年120名前後の学生がこのバプテスト史を履修し今日に及んでいる。履修生は教員の期待をはるかに超える興味を示し、口を揃えて「関東学院の歴史と学院を育んだバプテストの思想、その精神を学べて良かった」、「バプテストの近代市民社会形成貢献について学べたこと、またそうしたバプテストの設立した大学で自分が学べることに誇りを持つことが出来た」、また「バプテストの精神を受け継いで、自分も将来活躍するものでありたい」等と心からの感想を述べてくれたのであった。本研究会の地道な活動が、本学の教育基礎研究の一部になっていることを嬉しく思うところである。

本学がこうした本学のキリスト教伝統を講義する「教科書」を作り、教派教会史の授業を開講した後に、他のキリスト教大学においても、本学の試みを模範にして自校史とは別に、各校の教派的伝統を講義する大学が生まれてきた。教科書が完成した年の「キリスト教学校教育同盟」総会で、私はランチタイムの自由時間に多くの他大学の大学宗教主任の先生方にその教科書を紹介したことがあったのであるが、「これはいいですね、私たちもこうした教科書を作りたいと考えていました」と言われたことがあった。本学では高等研がその後「自校史教科書」を編纂下さり、少しずつではあるが大学教育の一端にこうした教科書が役立ってきたのではないかと自己分析している。

さて2020年度から私の後任として経営学部の内藤幹子先生が本研究会の代表に就任され、客員研究員も2名増員され、今後の活発な活動に期待が寄せられている。私自身は今年度4月から一研究員の立場に変わり、こうした報告もこれが最後となるが、これまで多くの諸先輩、先生方に数えきれないお力添えを賜ったことに改めて感謝申し上げる次第である。今年度も本グループは論集第5号刊行を予定し秋学期を迎えたが、残念なことに今年度の大学出版会事業はコロナ禍のために中止となり、論文集発行は次年度に行われることとなった。第4号研究成果の幾つかは「社会連携センター公開講座」でも秋に発表され、良き講座を行うことが出来た。研究会の報告は『所報』をご覧頂きたい。

所員紹介

中津 秀之
Hideyuki Nakatsu

建築・環境学部の中津秀之です。新規所員として自己紹介させて頂きます。関東学院大学に赴任したのは、２０００年４月です。それまでは建設会社の設計部でランドスケープの設計を担当しておりました。「ランドスケープ」というのは、日本だと造園と都市計画を合体させた様な仕事で、樹木等の自然素材を使って都市空間をどのように豊かな空間に作り変えるかを考える仕事です。私自身は、集合住宅の建設をメインとする建設会社に勤務していたので、都市生活者の住空間の庭や公園の設計を得意としております。

生活拠点を大学に体重移動した後も設計活動は続けており、公園設計の経験を活かして、子どもの生育空間の実態調査や遊具の安全問題に関する研究活動を学生たちと実施しながら、あちこちの子ども環境の提案を行っております。六浦こども園やのびのびのば園の園庭も私の設計です。

特に六浦こども園の園庭設計の後、継続的に子どもの遊びを観察しながら、園児の父親たちと「お父さんの会」を結成し、子ども達の成長を暖かく包み込む園庭の在り方を模索しつつ、毎月1回、園庭改造ワークショップを実施しております。その会の運営を通し、キリスト教に触れる機会が多く、自分自身、キリスト教の幼稚園を卒園して以降忘れていた信仰の気持ちを取り戻しております。

今後とも、宜しく御願いします。

川村 覚文
Satofumi Kawamura

人間共生学部コミュニケーション学科の川村覚文と申します。政治理論、比較哲学、メディア文化研究を専門としております。研究の出発点は、フランスの哲学者であるミシェル・フーコーによる権力理論、とくに統治性論を参照しつつ、近代日本の哲学・文化言説、とくに京都学派による文化理論のはらむ権力的な主体化作用について分析したものでした。最近では、より現代の政治理論や社会理論に視点を移し、高度に発達した情報社会において、統治性がいかに作動しているのかと言うことに注目しています。今日の情報社会におけるメディア・テクノロジーは、たとえばビッグ・データとプラットフォームの関係に見られるように、それまでテクノロジーの主体であった人間を、むしろテクノロジーによって利用される情報的な客体へと転化させています。このようなテクノロジーの浸透は、フーコーが統治性を支える知として批判的に分析した統計学が、社会的に全面化された状況である、と考えられるでしょう。このような社会状況に批判的に介入できる政治理論や社会理論について考察すべく、最近では情動理論や加速主義などについて注目しています。

関東学院大学　キリスト教と文化研究所
〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL：０４５－７８６－７８７３（研究所直通・月～金９：30～17：00）
FAX：０４５－７８６－７８０６（研究所直通・24時間受け付）

発行者：細谷　早里
Director：Sari Hosoya